



結城市未来デザインチーム 提言発表

令和7年3月19日（水）

タイムスケジュール

16：00－16：10

プロジェクトの目的・趣旨説明

16：10－16：40

未来デザインチーム提言内容発表

【問1】わたしたちが目指すべき30年後の未来は？

【問2】どうすればわたしたちは目指すべき未来をデザインできるのか？

【問3】わたしたち（行政）は、何をどう変化させる必要があるのか？

16：40－16：50

3役（市長・副市長・教育長）講評

1 「若手職員による未来デザインプロジェクト」の目的・趣旨

目 的

結城市制施行70周年を記念して、28～38歳の職員を中心とした

「結城市未来デザインチーム」を組成し、30年後に100周年を迎える本市において、
想定される課題の整理とそこから目指すべき将来世代やわたしたちの未来について議論する。

その議論から、縮小する近未来を現実的に洞察したときに、今何を考えておくべきなのか、
分野別に意見や考え方を共有する提言書（タイムカプセル）を作成し、
「第6次結城市総合計画策定委員会」に提出する。

テーマ



「OUR FUTURE (30年後のわたしたち)」

未来を予測することはできないけれど、

未来のわたしたちに思いを馳せることはできる。

1 「若手職員による未来デザインプロジェクト」の目的・趣旨

シナリオ

短期思考から長期思考へ——。

恐らく、皆さんが考える以上に、我々行政職員（現代世代）の議論が未来の結城市へ及ぼす影響は大きい。

けれど、まだ生まれていない、将来に生きる市民（将来世代）は、現在の議論には参加できない。

よりよい未来や持続可能な社会のために、わたしたちが今できることは何なのか？
何をどう変化させる必要があるのか？

30年後、そもそもわたしたちはどうなっているのか？

将来世代とわたしたちが暮らす30年後の結城市をクリエイティブに想像し、未来をデザインしていく。

——「OUR FUTURE（30年後のわたしたち）」

デザイン Design

“【動】設計する
de-「外へ」sign「印」として示し出す”
一般的に“色や形”と捉われがちだが
**人を中心に考え 目的・狙いを持って
計画しカタチにしていくこと。**

1 「若手職員による未来デザインプロジェクト」の目的・趣旨

これまでの経過について

30年後の未来のために 今考えるべきこと（バックキャスト）

Session 1	Session 2	Session 3	まとめ
【議論 1】 30年後の日本を想像してみる (ブレインストーミング)	【議論 3】 わたしたちが目指すべき 30年後の結城の未来は？		3つの【問い】に対するアイデアを提言としてまとめた 【問 1】 わたしたちが目指すべき 30 年後の未来は？ 【問 2】 どうすればわたしたちは目指 すべき未来をデザインできる のか？ 【問 3】 わたしたち（行政）は、何を どう変化させる必要があるの か？
【議論 2】 30年後の結城市を想像してみる (ブレインストーミング)	【議論 4】 どうすればわたしたちは目指 すべき未来をデザインできる のか？	【議論 4】 どうすればわたしたちは目指 すべき未来をデザインできる のか？（続）	
【結果】 191のアイデアが投稿され、 キーワードや前提条件が整理 された	【結果】 3つのグループごとに「わた したちが目指すべき30年後の 未来」を定義した	【結果】 目指すべき未来に導くための 長期的な考え方を分野別に提 案した	

1 「若手職員による未来デザインプロジェクト」の目的・趣旨

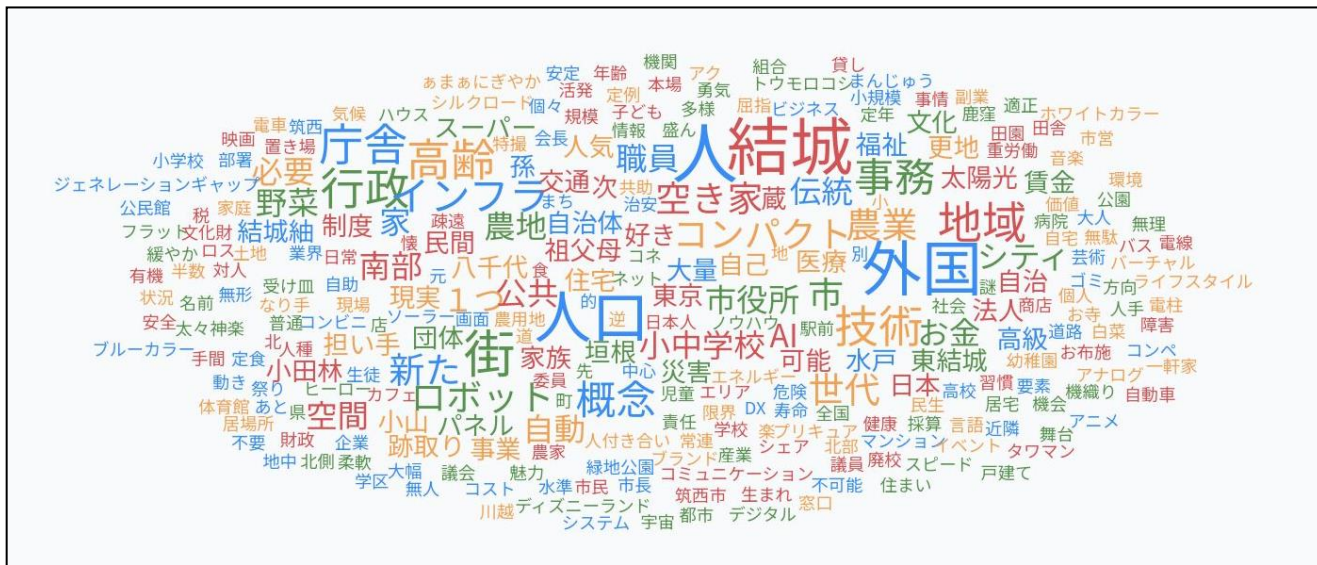
これまでの経過について

- ・全3回のワークセッションにあたっては、『じっくり話してしっかり決める』をコンセプトに開発された合意形成プラットフォーム「Liqlid（リクリッド）」を活用し、そこにアイデアを投稿していくことでプロセスを可視化しました。
- ・スマホやPCから時間、場所を問わず参加可能であるため、会議内だけでなく、ふと思いついたタイミングで投稿ができ、更には下のような分析も可能であるため、職員参集の省力化が図られました。

▼アイデア投稿画面



▼「30年後の結城市を想像してみる（ブレインストーミング）」のワードクラウド



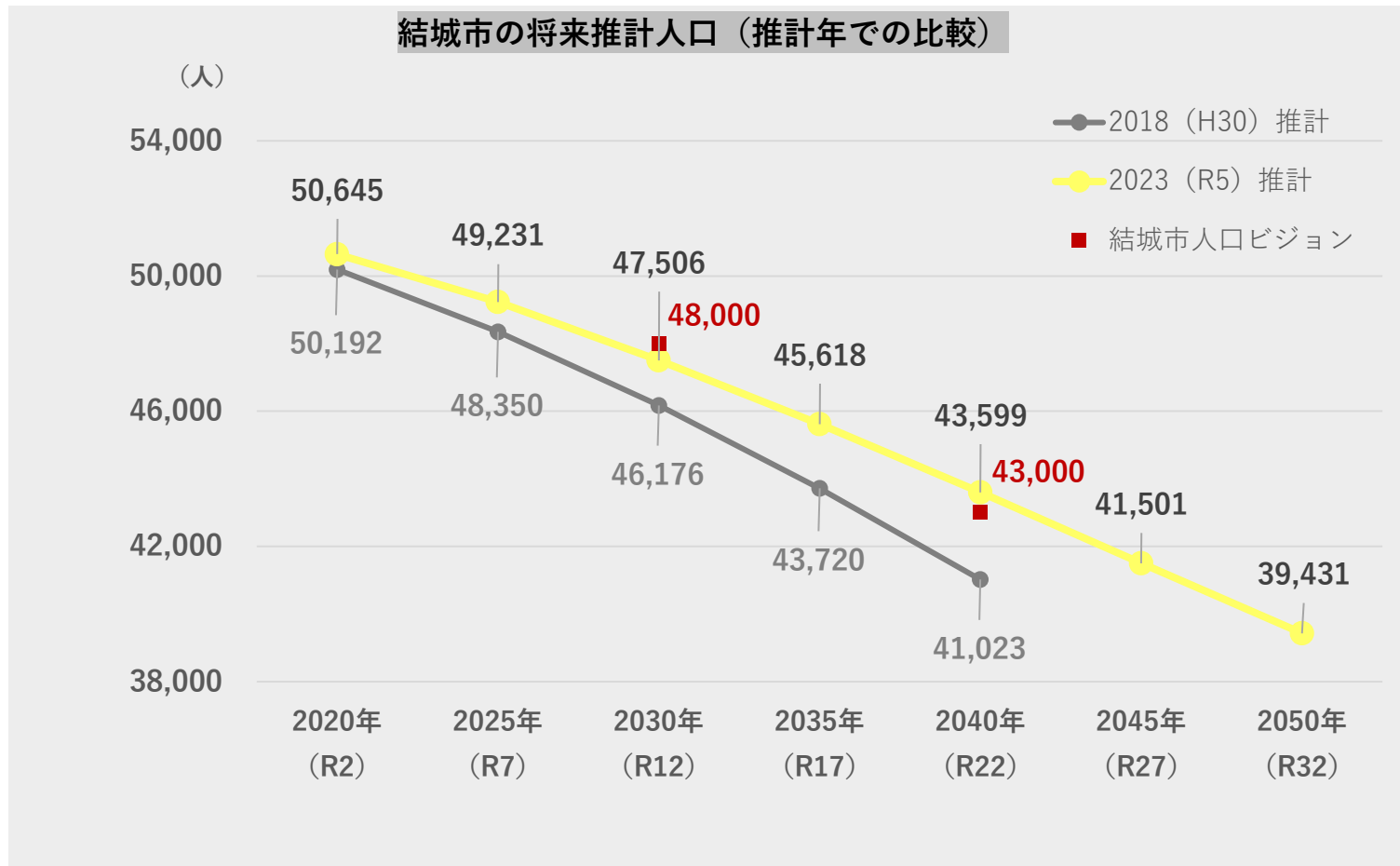


共有しておきたいデータ

【参考】共有しておきたいデータ

結城市の将来推計人口

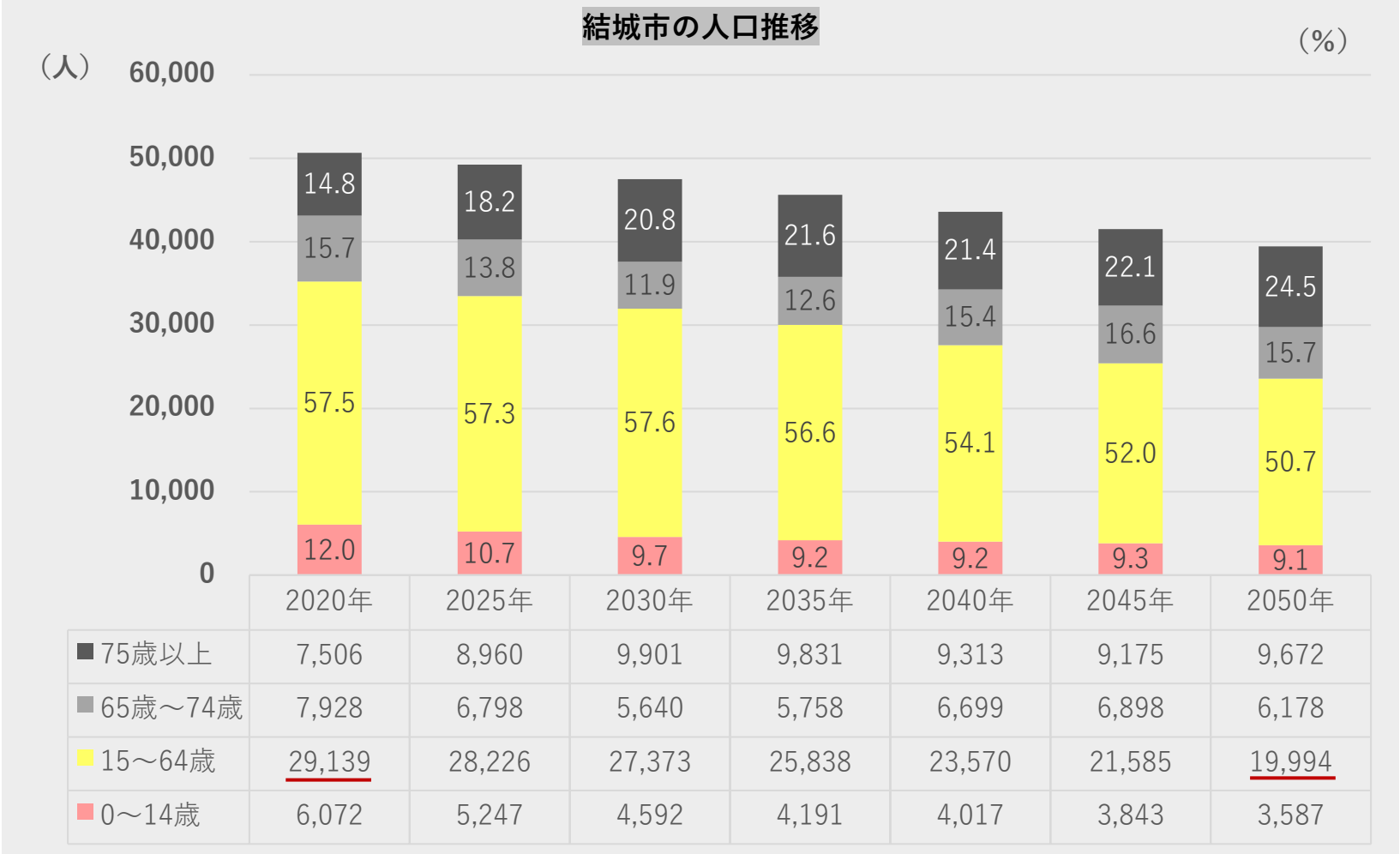
- ・ 2020年に50,645人だった結城市の人口は、**2050年は39,431人**となり、11,214人（22.1％）減少すると推計されています。



出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

人口推移

①15歳～64歳の生産年齢人口の減少 ②0～14歳の年少人口の減少 ③75歳以上の後期高齢者の増加・高止まり



出典：国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

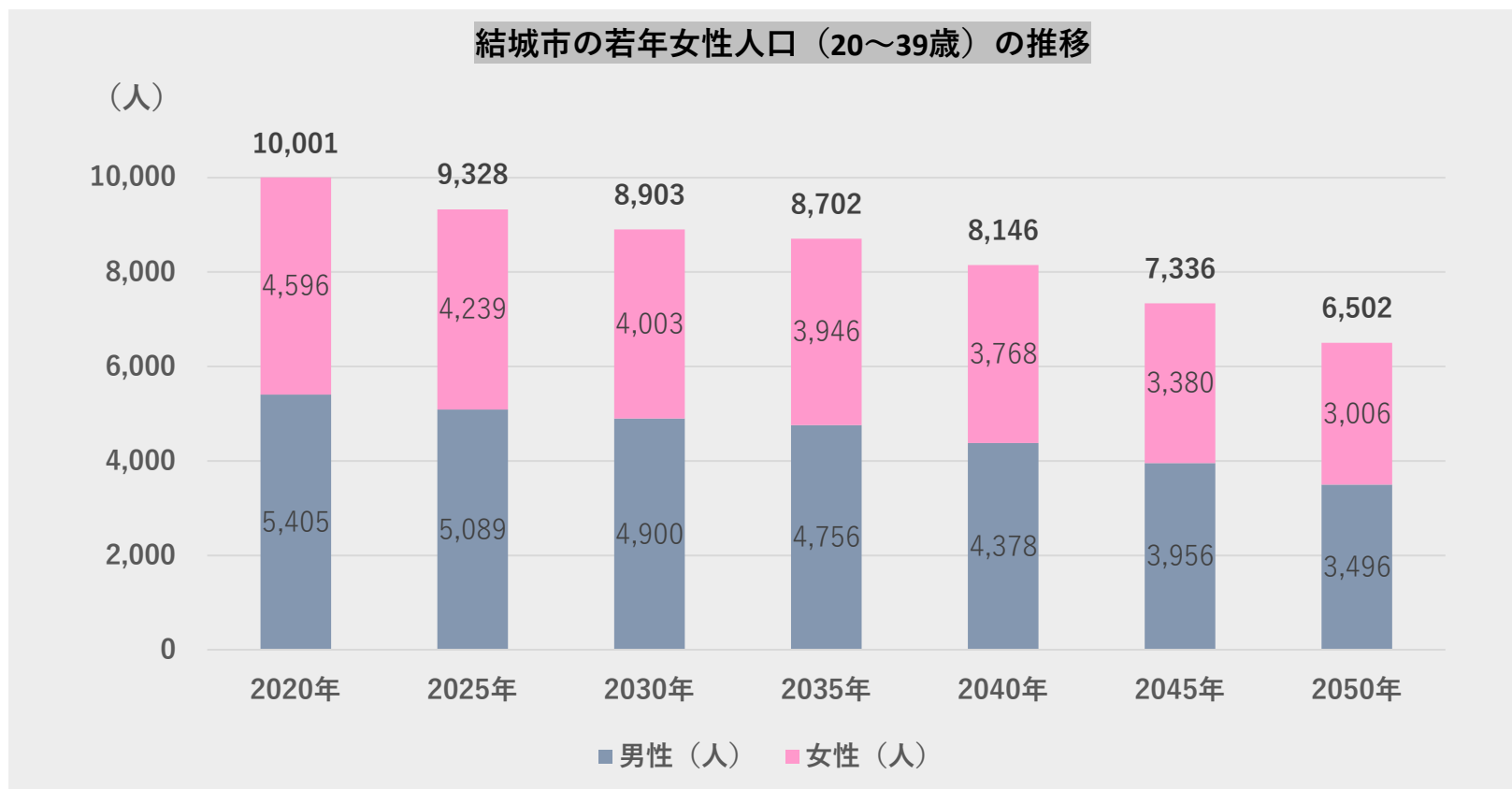
【参考】共有しておきたいデータ

若年女性人口の推移

※若年女性：20～39歳の女性

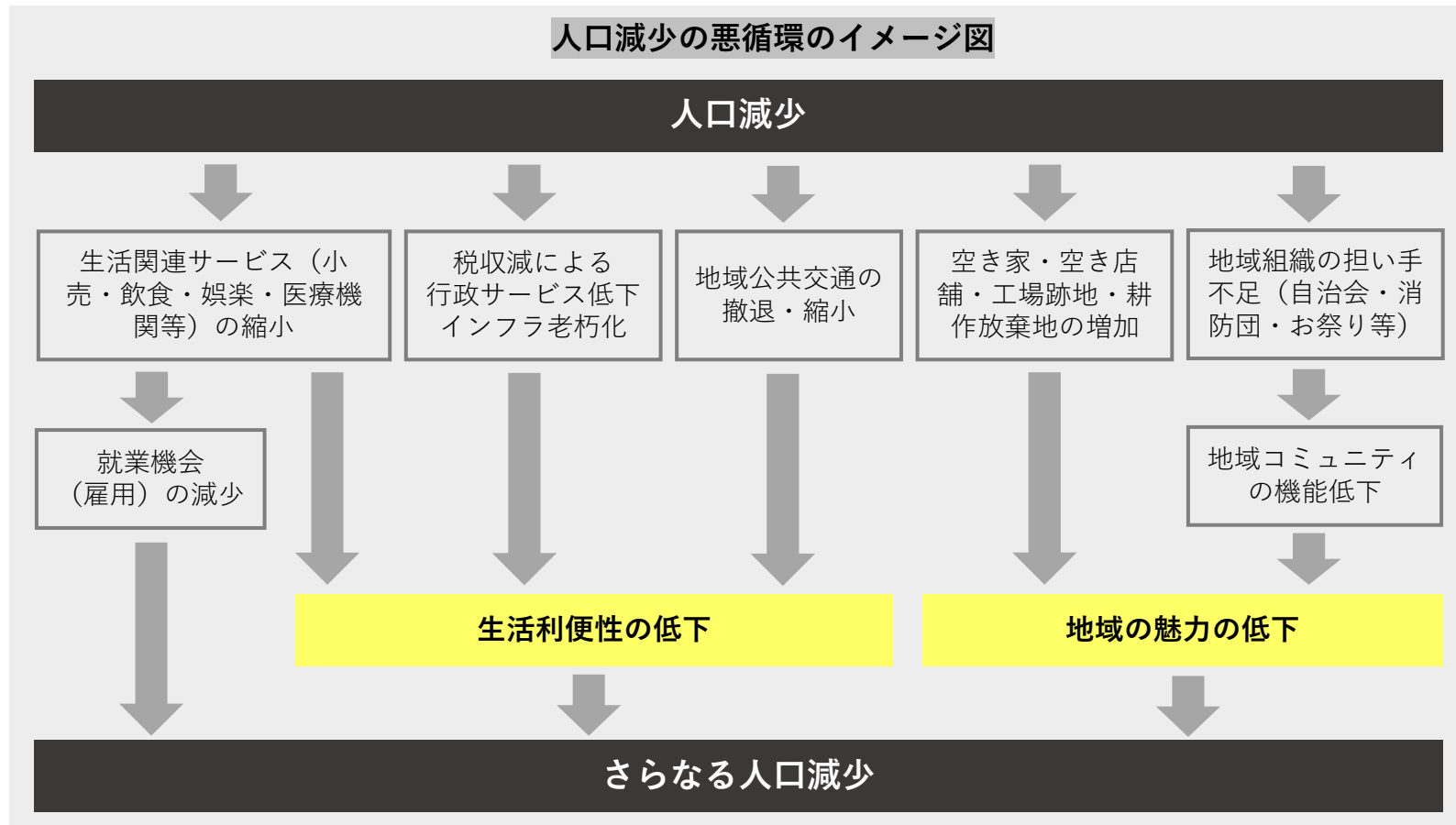
・合計特殊出生率のうち、95%は20～39歳の女性によるものであり、若年女性人口が減少し続ける限りは、人口の減少に歯止めがかからない関係にあります。

・民間組織「人口戦略会議」では、2020～50年の30年間で、子どもを産む中心の年代となる20～39歳の女性が半数以下となる自治体は「消滅可能性」があると分析しています。



人口減少の悪循環

・人口減少による地方のまち・生活へのそれぞれの影響は、生活利便性の低下や地域の魅力の低下を通じて、さらなる人口減少を招くという悪循環に陥ることが考えられています。

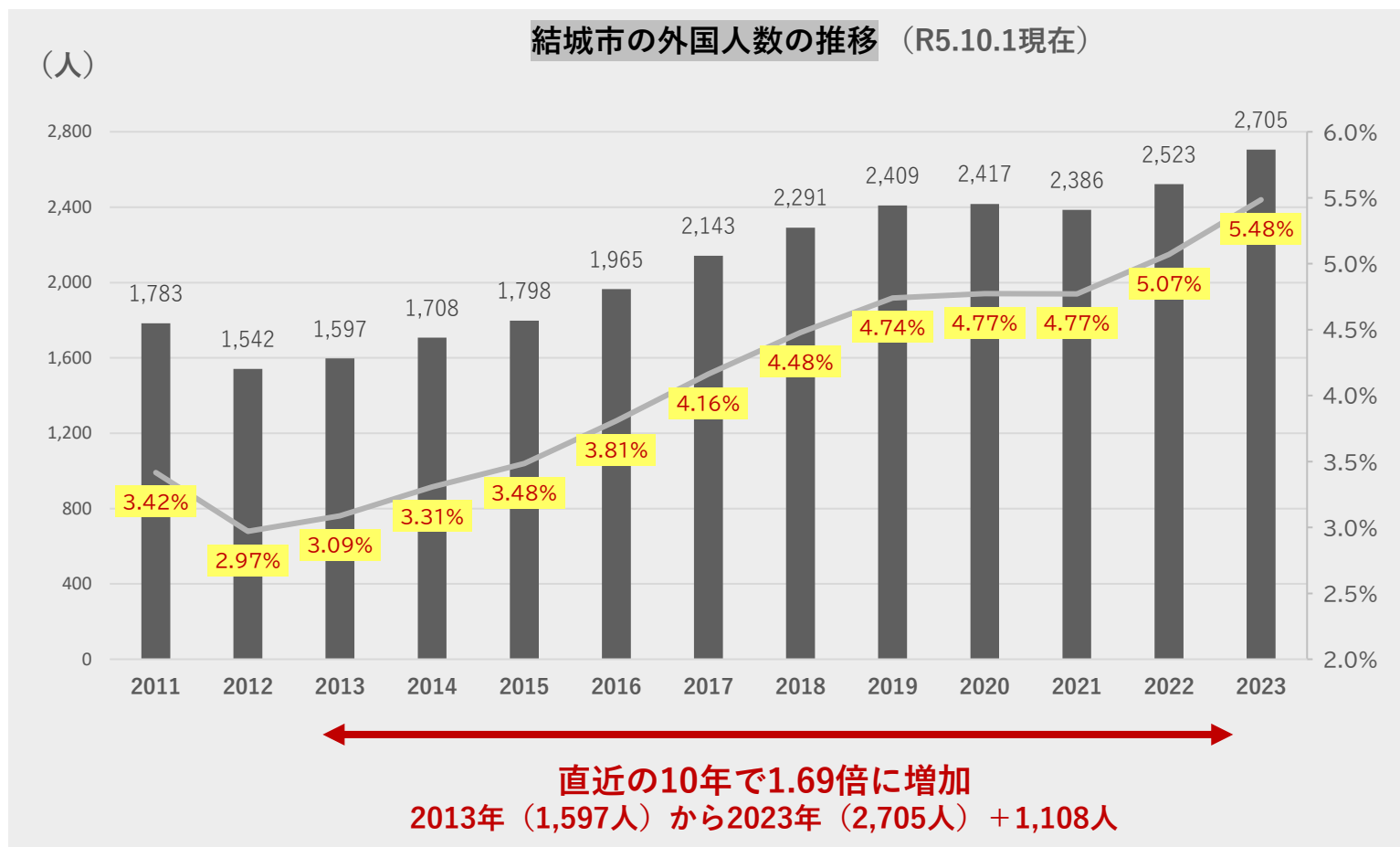


出典：国土交通省「人口減少が地方のまち・生活に与える影響」より本市作成

【参考】共有しておきたいデータ

外国人数の推移

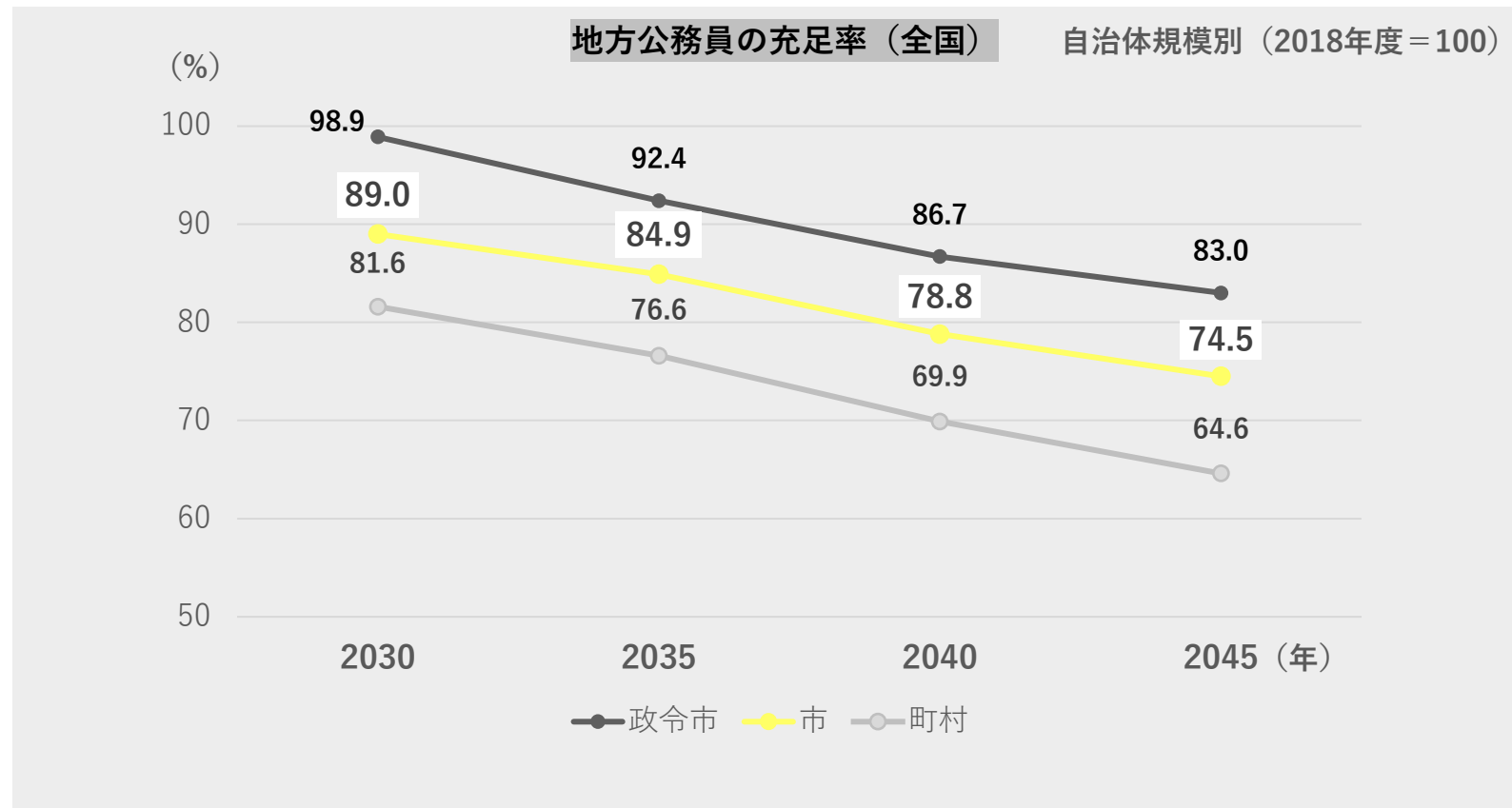
- ・ 社人研による本市の人口推計値が上方修正された要因として、外国人増加率が反映されていることがあげられます。
- ・ 外国人の増加が、日本人の社会減や少子化による人口減を下支えしていることがわかります。



【参考】共有しておきたいデータ

地方公務員の充足率予測（全国）

- ・ 現行サービスを維持するための地方公務員は、2045年には25%以上不足すると予測されています。
- ・ 人口減少＋流出により、職員のなり手（母数）が減少することで、定員割れが常態化していきます。

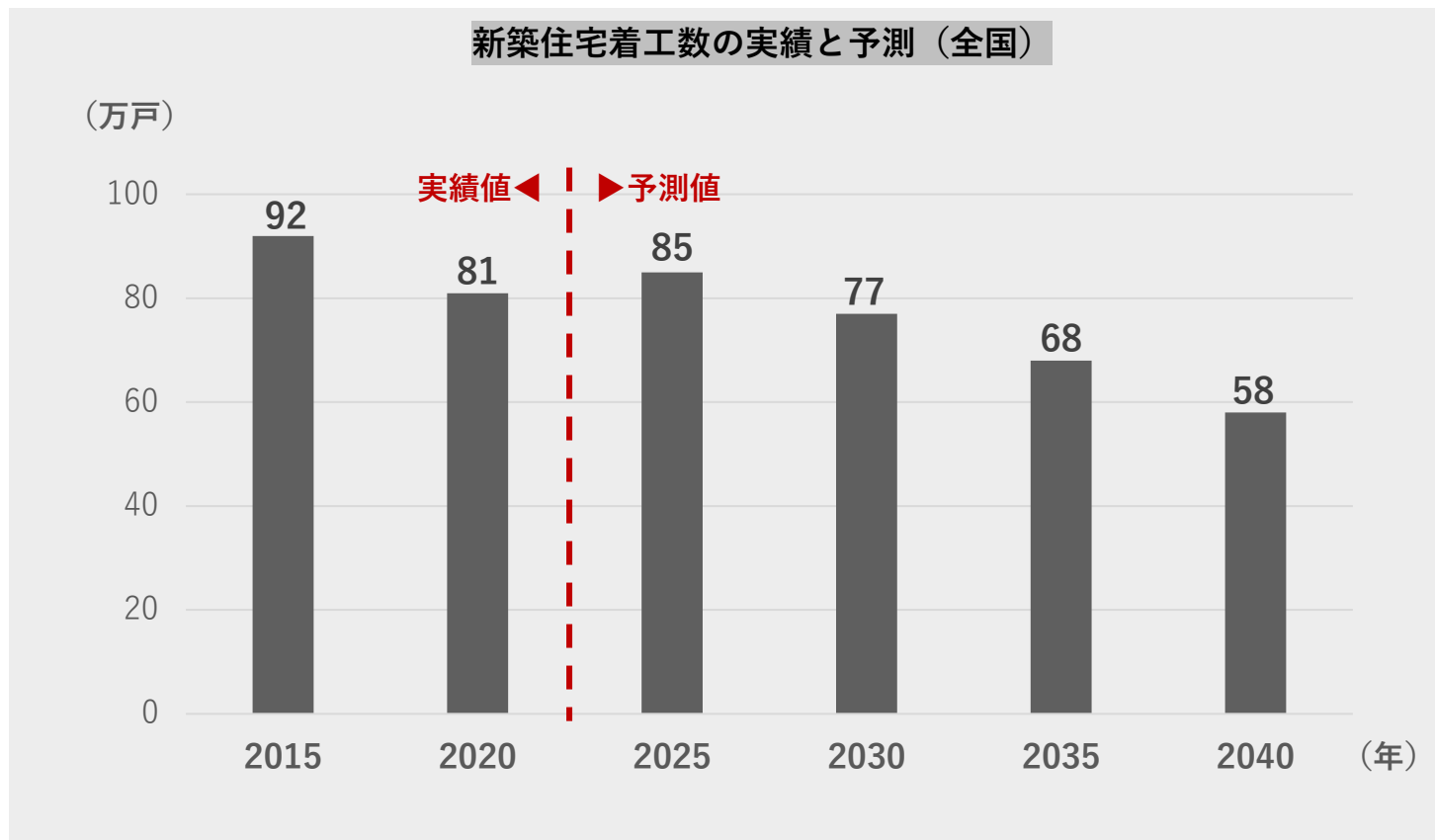


出典：日本総合研究所「地方公務員は足りているか-地方自治体の人手不足の現状把握と課題-（2021年）」より本市作成

【参考】共有しておきたいデータ

新設住宅着工数の実績と予測（全国）

- ・ 2040年度の新築着工件数は37%減少すると予測されています。（2015年度比）
- ・ 人口減少社会において、宅地を開発して都市を拡張させ続けることは困難な状況になります。

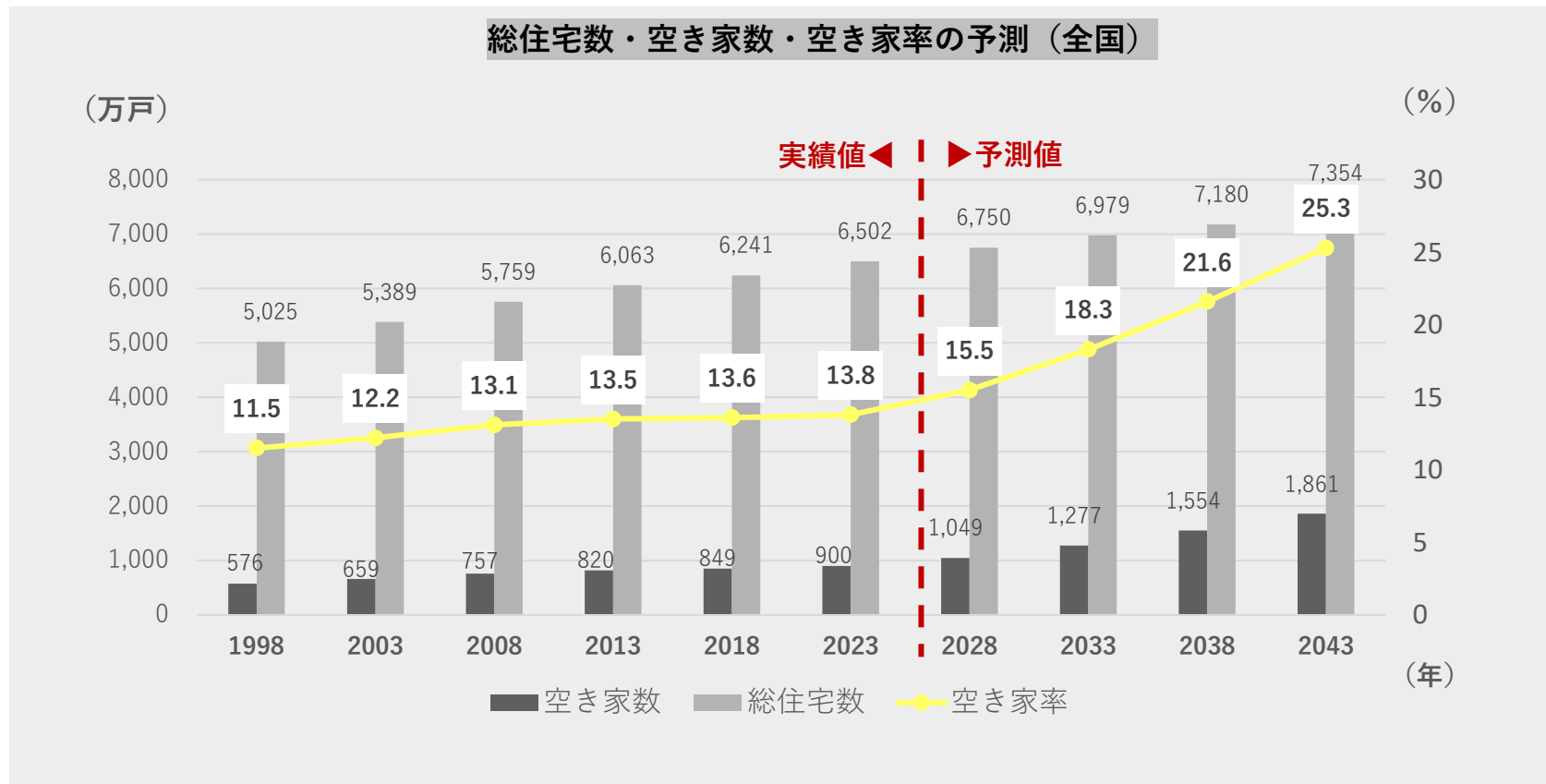


出典：野村総合研究所「2040年の住宅市場と課題」より本市作成

【参考】共有しておきたいデータ

空き家率シミュレーション結果（全国）

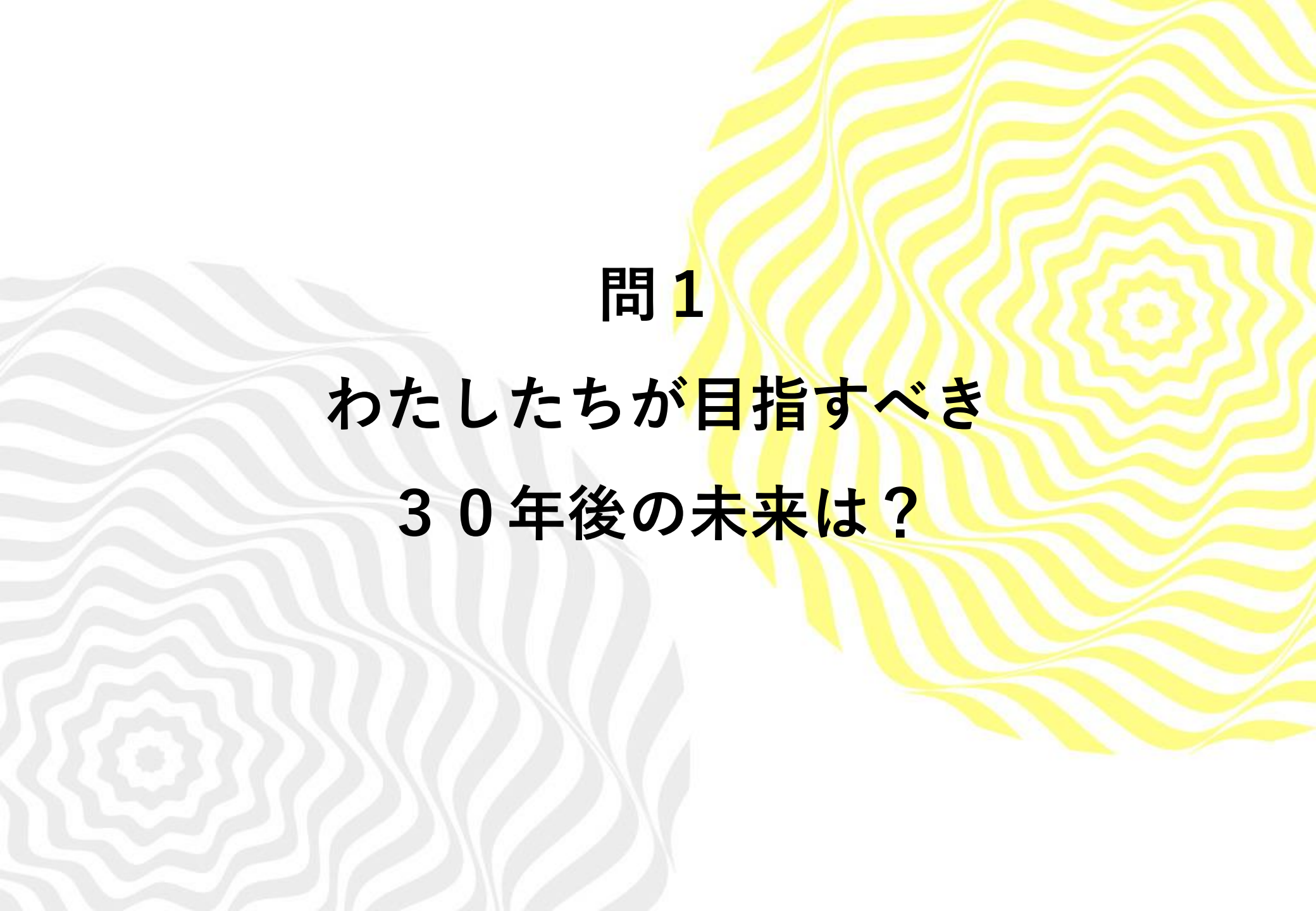
- ・ 除却水準が直近のまま継続する場合、2043年の空き家率は約25%に上昇すると予測されています。
- ・ 少子化により住宅取得の中心世代である30代が減少傾向にあるため、供給過剰な状況と考えられます。



出典：野村総合研究所「2040年の住宅市場と課題」より本市作成

【最悪シナリオ】

高齢者しかいなくなり、
人とともに地域の消滅を
待つのみとなっている。



問 1

わたしたちが目指すべき
30年後の未来は？

結城の価値を、これからもずっと――

人口減少が進む社会のなか、社会構造や生活の価値観が変わったとしても、

「結城」の価値は変わらないものでありたい。

息づく風土や風景、先人が営み育んできたこの地を大切にしていきたいという

想いが我々にはある。

そこに新たな風が吹き、結城の価値を形成する要素となる。

過去を学び、未来を望み、今を生きる。

そのために、人とのつながり、文化・伝統、教育、健康など住民の満足度や

生活の質を高め、「結城」が輝きを放つ未来を望みたい。

質を保ち、未来へ――

人口はどんどん減っていくけれど、悲観することはない。

一人ひとりの魅力・個性・知力・想像力・生産力を高めていくことで解決できるはず。

現実でもデジタルでも、みんなで近くに集まって、ちょうどいい距離間を感じながら、コンパクトに、快適に生活していけばいい。

わたしたち（行政）も、ステレオタイプに囚われることなく、

やれることは「スマートに」汗をかきながら、挑戦していく。

結城は（意外と）居心地の良いまちだから、現在の「質」を保ってさえいれば、

30年後も（意外と）居心地の良いまちのまま、ここにあると思う。

エネルギーをまちの推進力に――

30年後に振り返った時、みんなが“ここに住んでいてよかった”と思える未来であってほしい。

今後、人口は減少し様々な分野で縮小を迫られるだろう。

それでも、若者・高齢者・外国人など多様な価値観を持つみんなが一つになり、人と地域が緩やかでも繋がり続けようとする力や、

シビックプライドという名の熱が集まると、そこにはエネルギーが生まれる。

このエネルギーは心地よく、それでいて様々なものを引き寄せる。

結城が人々の活動やエネルギーが行き交うハブとなって、

エネルギーを創出し続けられるまちでありたいし、

そのエネルギーをまちの大きな推進力に変えていくのがわたしたち（行政）の役目だ。

問2

どうすればわたしたちは
目指すべき未来を
デザインできるのか？

OUR FUTURE

テーマ | 子育て

「選ばれるまち」になるために——

人口減少を食い止めるには、若い女性に地域に残ってほしい。

そう考えるのは自然なことかもしれない。

でも、その裏には、「このまちで結婚して、子どもを産んでほしい」という、無意識の圧力が潜んでいないだろうか？ そうした空気が、かえって若者たちを、多様性が認められる東京へと押し出しているのかもしれない。

大切なのは、「ここにいなければならない」と思わせるのではなく、「ここにいたい」と思えるまちであること。

結婚、出産、子育て——人生の選択肢は人それぞれであり、それを尊重し合える風土があれば、きっと結城は「選ばれるまち」になれるはずだ。未来を生きる人たちが、自分らしく生きられる場所。

それこそが、本当に目指すべき姿なのではないだろうか。

「結城がいい」じゃなくても、「結城もいい」と思えるまちへ——

少子化が進み、全国の自治体が「子ども・若者の奪い合い」をする時代がやってくる。けれど、人の人生は計画通りにはいかないもの。

進学や就職、結婚、子育て——そうした人生の大きな選択は、意外と「縁」や「偶然」によって決まることが多い。

だからこそ、「絶対に結城に住んでほしい」と力むのではなく、

「結城”も”いいよね」と、選択肢に残れるかどうかが大事なのかもしれない。

そのためには、完璧を目指すのではなく、70～80点の「持続的な子育て環境」をしっかりと維持すること。

そして、市内外の若者たちに「結城」という名前をもっと身近に感じてもらうことが必要だ。偶然の縁が「ここに住みたい」という気持ちにつながるように、私たちのまちの魅力を、さりげなく、でも確実に伝えていくことが未来への一歩になるのかもしれない。

OUR FUTURE

テーマ | 高齢者

「80歳まで現役」の時代、その先にあるものは——

医療や創薬の進歩で、寿命はさらに延び、「80歳まで現役」なんていうのが当たり前の時代がやってくるかもしれない。

ロボットが介護や話し相手になり、VRを通じてリアルと変わらない交流ができる。

見守りシステムも整って、独居や孤独死の心配も少なくなるだろう。でも——

それで本当にいいのだろうか？確かに、技術の力で生活は便利になる。

けれど、その一方で、若い世代が減り、高齢者と若者がほとんど交わらない

「世代間の分断」が進んでしまう可能性もある。

どんなに時代が変わっても、人と人が助け合う社会は必要だ。

教育と福祉を融合させたり、多世代が自然に交われる仕組みをつくったり——

「公民館」のような、みんなが集まれる心の居場所がこれまで以上に大切になるのかもしれない。

テクノロジーが進んでも、人の温かさを感じられる未来であってほしい。

超高齢社会の課題と、新しい「居場所」のカタチ——

少子高齢化が進み、社会保障制度はますますひっ迫し、若者は負担の重さに不満を抱き、高齢者は十分な医療や介護を受けられないことに不安を感じる——そんな未来がすぐそこまで来ている。

けれど、この状況を少しでも良い方向に変えていくことはできるはずだ。

たとえば、デイサービスに農業を取り入れたらどうだろう？

スマートバンドで健康管理をしながら、自然の中で体を動かしリハビリをする。

誰も住まなくなった集落の畑も、高齢者が集い、働くことで再び活気を取り戻すかもしれない。

「助けられる側」ではなく、「支える側」にもなれる社会——そんな仕組みがあれば、医療費の削減や食料自給率の向上にもつながるはずだ。

「老後の住まい」を、もっと前向きに考える時代へ——

日本より一歩先を行く福祉国家、デンマークでは、高齢者住宅地域が増えている。自立しながら適切な支援が受けられ、交流の場がある——そんな環境があるだけで、老後の暮らしはぐっと豊かになるのではないだろうか。

50代のうちにこうした住宅地域に移り住めば、健康寿命が延び、医療費の負担も軽くなる可能性がある。

「老後の住まい」をネガティブに捉えるのではなく、新しい暮らし方のひとつとして前向きに考えられる未来。

そんな社会を、今から少しずつ築いていきたい。

OUR FUTURE

テーマ | コンパクト
シティー

「利便」と「悲痛」の狭間で—コンパクトなまちづくりの挑戦

人口が減るからこそ、みんなが快適に暮らせるように、限られた財源の中で最大限の効果を発揮することが求められる。

だからこそ、居住を市街化区域に集約し、公共施設やインフラを効率よく整備していく「コンパクトシティ」という考え方が生まれた。

わたしたち（行政）は、これらの施策を推進する立場にある。

でも、この仕組みは「便利さ」と引き換えに、地域によっては消えてしまう場所がある。愛着のある土地を離れざるを得ない人たちがいて、その決断には深い「痛み」や「悲しみ」が伴う。

行政としての理想と、住民の感情との間で揺れ動くこのジレンマに、わたしたちは30年後も向き合い続けることだろう。

未来の暮らし方ー「集まる」か「散らばる」か

インフラの維持が難しくなり、市北部に住まいを集約せざるを得なくなる一方で、市南部の自然環境が見直され、「2拠点居住」という新しい暮らし方が広がるかもしれない。

けれど、技術革新が進み、自動運転やドローン、遠隔教育や高齢者の見守りシステムが普及すれば、「人が集まる必要がない社会」が訪れる可能性もある。

そうなれば、むしろ市全域に人が散らばるという、今とはまったく逆の流れが生まれるかもしれない。

30年後の私たちは、果たして「集まる」未来を選ぶのか、
それとも「散らばる」未来に適応していくのか——
その選択は、今からの積み重ねにかかっている。

OUR FUTURE

テーマ | 交 通

30年後、東西の移動はどう変わる——

30年後、西條企画財務部長（筑西市在住）は86歳になる。

そのとき、わたしたちは未来の西條さんと結城で一緒にお酒を飲んでいるだろうか？

いや、それ以前に、そもそもJR水戸線はまだ走っているのだろうか？

もし水戸線がなくなってしまったら、東西の移動をどう支えるのか。

まちとまちを繋ぐ新しいカタチを考え、

地域間の連携を今から深めていかなければならない。

30年後も「じゃあ、結城で一杯やるか」と気軽に言える未来のために、

今のうちに動き始めても、決して早すぎることはない。

OUR FUTURE

テーマ | 空き家

増え続けた戸建て、その未来は――

かつては当たり前だった3世代同居も、今ではすっかり核家族化が進み、戸建て住宅が街にあふれている。けれど、私たちの親世代が建てた家、そして私たちが建てた家は、この先どうなるのだろうか？

人が減り、建物の管理が行き届かなくなれば、地域のつながりも薄れ、ゴーストタウン化してしまうエリアも増えてくるかもしれない。

でも、空き家をただ放置するのではなく、サブスク型のレンタルサービスやドローン充電拠点として活用するなど、「家＝一生住み続けるもの」という固定観念を手放せば、新しい暮らし方が見えてくる。

これからの時代に合った柔軟な発想で、まちの未来をつくっていききたい。

住まいのあり方が変わるなら、 コミュニティも変わらなければ——

居住エリアを市街化区域に集約するなら、今住んでいる人たちの住まいをどう確保するかが大きな課題になる。

相続放棄などで所有者のいない空き家が増え、税収が減るのは避けられない。

でも、行政主導ではない空き家マッチングのような仕組みを使って、個人同士がつながれる場をつくれば、空き家も新しい住まいとして活用できるかもしれない。

そして、住まいのあり方が変われば、地域のつながり方も変わる。

自治会などの新しいコミュニティが生まれ、行政がうまくサポートすることで、市民の自治力も高まっていく。

30年後も、「このまちで暮らしたい」と思える場所であるために、住まいも、そして人と人とのつながりも、時代に合わせて進化していくべきなのかもしれない。

OUR FUTURE

テーマ | 産 業

テクノロジーと共に歩む、結城の新しいカタチ——

人口減少が進む中で、結城の未来を支えるには、市民一人ひとりの力を引き出し、生産性を上げることが必要だ。

スマート農業や地域産業の集約化を進め、ICTやAIを活用することで、人手不足の問題も解決に向かうだろう。

ECの普及により「食」に関わる店舗以外は減少し、農業の大規模化が進むかもしれない。

バーチャル空間やリモートワークが当たり前になり、「多拠点居住」という新しいライフスタイルが根付いていくけれど、どんな時代でも、産業を営むには「人が集う」ことが基本となる。

文化や歴史、人と人とのつながりを大切にしながら、新しい産業のカタチを見つけていく必要があるだろう。

OUR FUTURE

テーマ | 小中学校

未来をつくる、学びのカタチ——

少子化が進むけれど、その分、一人ひとりの子どもにじっくり目をかけてあげられると考えてみよう。

学校は、みんなに同じことを教える場ではなくなり、AIや教育研究を活かして、それぞれに合った「学びの場」へと進化していく。

オンラインや仮想現実が当たり前になり、世界中とつながる未来だからこそ、地域のつながりをどう育むかが大切だ。

たとえば、仮想現実空間で集まりながら、結城の未来を一緒に考える。

そして、それを実際のまちづくりに活かしていく。

知識だけでなく、創造力や問題解決力、そして郷土愛も育めるような環境を整え、未来の結城で躍動する子どもたちを増やしていきたい。

30年後の学校は、知識を超えた「つながりの場」へ——

どこにいても学べる時代になり、学校は画一的な教育の場ではなくなるかもしれない。個々のペースに合わせた授業が中心となり、教室に集まる機会は減り、

「学友」と呼べる関係性も変化していくだろう。

しかし、どんな時代でも地域の未来をつくるのは、その地で育った子どもたちだ。だからこそ、学校は「地域をつなぐ場」としての役割を担い、世代を超えた交流の拠点になっていく。

AIといった技術の発展が知識習得をサポートするからこそ、人と人が触れ合う時間に価値が生まれ、郷土愛や道徳心を育む場としての意義が増していくのではないか。30年後、学校はただの「学びの場」ではなく、「人と人とが結びつく場所」として、新たな役割を果たしていることだろう。

OUR FUTURE

テーマ | 外国人

量に依存しない生産モデル——

外国人が結城市の人手不足を支えているが、コミュニケーション不足により地域コミュニティになじめず、労働力として頼りにしていた外国人人材も今後は流出していくかもしれない。

多文化共生を目指すことが求められており重要ではあるが、そもそも外国人労働者に依存しない生産モデルを構築し、量でまかなうという発想をやめる考え方も必要になってくる。

多様なルーツを持つ市民とともに築く未来——

30年後の結城を支えるのは、どんな人たちだろう。

伝統産業の後継者、部活の指導者やボランティア活動——

そんな地域の大切な役割において、外国にルーツを持つ人たちが今よりもっと当たり前
前に活躍している。そんな未来が訪れるかもしれない。

その可能性を地域の私たちが受け入れること——

お互いが歩み寄り、対話を繰り返していくことが何よりも大切だ。

「相手をよく知らない、分からない」という理由で、切り離されることのない社会に
なってほしい。

外国人は結城を選び続けるだろうか――

今後、結城の外国人は増え続けることが予測される。

しかし、ただ待っているだけでは、有能な人材が自然と集まるわけではない。

茨城県では、すでに外国人の転出超過傾向が続いているという現実もある。

もし、地域としての魅力を高められなければ、支援を必要とする人ばかりが集まり、行政の負担が大きくなる可能性もあるだろう。

だからこそ、今のうちに「働きたい」「住み続けたい」と思える環境をつくる必要がある。就労環境を整え、学習支援を充実させ、地域とつながる機会を増やす。

そうすることで、結城は「ただの通過点」ではなく、「選ばれるまち」へと生まれ変わるのではないだろうか。

OUR FUTURE

テーマ | 地域・
コミュニティ

「つながらない時代」に、 結城だからこそ感じられる誇りを——

テクノロジーが進化し、衣食住のすべてが「個人」で完結する未来が訪れると、家から出る理由がどんどんなくなっていく。

自治会は消え、隣人と顔を合わせる機会も減っていくかもしれない。

だけど、人はやっぱり「つながり」を求める生き物だ。

これからは、居住地に縛られず、生きる楽しみや目的を共有できる仲間と、リアルでも仮想空間でもゆるやかにつながる生活が当たり前になる。

そんな時代だからこそ、「このまちに住んでいる意味」がより大切になると思う。

結城の風土や景色、受け継がれてきた文化——そんな「結城ならではの価値」に、市民一人ひとりが改めて気づき、この地で暮らしていることを誇りに思えるようになることが必要である。

問 3

わたしたち（行政）は
何をどう変化させる必要があるのか？

若手が躍動する、これからの行政のカタチ——

これからの時代、行政も今までのやり方では立ち行かなくなる。
職員数が慢性的に不足していく中、定年延長で組織内の少子高齢化が進めば、
若手の活躍の場が狭まり、閉塞感が増してしまうかもしれない。
だからこそ、単純な手続き処理はAIに任せ、本当に人がやるべき仕事を見極めることが必要だ。

特に、志の高い職員には、変化の激しい社会に対応できるようなクリエイティブな仕事をより担ってほしい。そうすることで、行政全体の生産性を上げ、新しい時代にふさわしい組織へと進化していけるはずだ。

そのためには、人事評価制度も含め、将来にわたって「ここで働きたい」と思える風土やカルチャーを根付かせることが大切だ。

若手がやりがいを感じながら挑戦できる組織へ——今こそ、その転換期に来ている。

「変わる行政、変わるまち」—覚悟を持って未来を語ろう

30年後、本市は単独での運営を続けているだろうか？

おそらく、合併や道州制、広域組合などへと移行し、今の形とはまったく違う行政になっているはずだ。

手続きはすべて個人のデバイスで完結し、庁舎の窓口はロボットが対応。インフラの維持管理もオートメーション化が進み、職員の数は大幅に減る。

そんな未来を前に、今やるべきことは「人口減少を前提にした行政運営」へのシフトだ。事業の廃止、公共サービスの縮小——耳の痛い話も避けては通れない。

本気でまちの未来を考えるなら、市民に正直に現実を伝え、みんなで議論する場をつくることが欠かせない。

そのためには、首長も議員も市職員も、「覚悟」を持って未来を語ることが求められる。変わる行政とともに、まちのあり方も変えていく。

そんな新しい一歩を踏み出す時が、来ている。

「結城を良くしたい」と思える職場に

結城を本気で良くしていくためには、まず市の職員自身が「結城が好きだ」

「このまちを良くしたい」と思えることが大前提。その未来を支える若手職員が、のびのびと力を発揮できることが何よりも大切だ。

しかし、モチベーションの高い職員ほど、ルーティン業務や他自治体の後追い業務ばかりでは気持ちの行き場を失い、やがて結城を離れていく。そういった人材を求めているながらも、彼らの力を十分に活かせていないかもしれない。

部署を超えた業務の実施、庁内での応援体制、若手による業務改善提案制度――

こうした取組を通じて、市の仕事に幅広く関わる機会をつくり、まちづくりに参加できているという実感と成功体験を積み重ねてもらう。

そうやって、職員がやりがいを持ち続けられるようにすることが、結城の未来を支える力になるはずだ。

総合計画、このままで本当にいいのか？

そもそも、総合計画は今の時代に合っているのだろうか？

地方自治法で定めがない今、総合計画の存在意義自体を考え直す必要がある。

でも、そのルーツを辿れば、高度経済成長期の人口増加を前提につくられたもの。

今や課題や事業を並べた「行政のための計画」になっているため、

市民の暮らしに寄り添っているとはいえない。

これからの時代、行政だけでは地域の課題を解決しきれないのは明らかだ。

だからこそ、市民の「本当に豊かで幸せな暮らし」を考えた、

みんなで共有できるビジョンへと見直していく必要があるのではないか。

今こそ未来にふさわしい形へとアップデートするときだ。

これらのアイデアをとおして
結城市は「人口減少に抗うまち」ではなく、
『創造力で新たな未来をつくるまち』
として積極的に未来をデザインする
ことが可能となるでしょう。



OUR FUTURE

（ 30年後のわたしたち ）